
竜の旋律

シキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の旋律

【Nコード】

N3775Q

【作者名】

シキ

【あらすじ】

これは竜と人が共存している世界のお話。主人公は平和な町の定食屋の息子。彼は同年代の友達が、竜騎士になろうと竜との契約に必死になっている中、まるで竜に興味がなかった。そして立派な定食屋になるためコンロの開発に精を出す。しかし突然、店にガラの悪い男たちがやってきて、そんな平和が崩れていく。

序章

「なんでだーーーー！」

まだ幼い彼にとって、それは重い現実。

「いつもより帰りが遅くなったただけなのに!!」

目の前には温かな家族がまっているはずの家が、激しい炎に飲み込まれていた。

否、少年の家だけではない。

少年が住んでいる村が、である。

「助けなくちゃ…父さん、母さん、ばあちゃんを…助けなくちゃ…
たすけ…なくちゃ」

少年は、ふらふらと火に近づいた。

どこか目は虚ろで、足取りも重い。

その時、炎の向こう側から声が聞こえた。少年は、もしやみんなが無事だったのかもしれないと思い駆け出そうとして、聞こえた内容

に立ち止まった。

「おいっ！全ての家を焼き払え！！証拠ひとつ残すな！！目的の物は見つかったか！？」

よく通る男の声だった。

そして、それに答える声が複数。

少年は一瞬哑然とし、次には怒りで顔を真っ赤に染めた。

こいつらか…こいつらがみんなを…

そして、一步一步ゆっくりと仇へ近づいていく。

あと少し…

あと少しでやつらに届く…

だが、それは叶わなかった。

少年が後ろから何かに捕まれ空へと舞い上がったからだ。

そして空高く舞い上がると静かな声が少年の頭上から聞こえた。

「死ぬつもりなのか？」

死ぬつもりか？だって？

僕は父さん達を殺そうとしたやつを殺したいだけだ！

「離せよ！！俺はアイツらを殺すんだ！父さん達の仇をうつんだ！
離せ！離せよ！」

少年は手足を必死で、ばたつかせる。しかしそれは小さな抵抗にしかならず、頭上の者は気にした風もない。

「頭を冷やせ。お前1人に何ができる。我らには、お前が必要だ。
お前を死なすわけにはいかない。」

「そんなの知るか！離せ！戻せ！頼む…頼む…から」

そのまま少年と、少年を連れ去った者——大きな翼をもった竜の影は徐々に村から離れ見えなくなった。

1、キャベツの千切り（前書き）

獲物から一瞬たりとも視線を外してなるものか。

彼の黒い瞳は、獲物を鋭くにらんだ。

足は肩幅に開かれ、いつでも攻撃にうつれる体制をとる。

そして右手には、鈍く光る相棒。

相棒の切っ先は尖り、よく手入れしているため切れ味も鋭い。

それを握り直して感触を確かめた。

この相棒ならば目の前の敵など容易く切れるだろう。

彼は獲物を視線で捉えながら、相棒を正眼に構え——切った。

トントントントントントン

手元からは軽快な音が響き、茶色いまな板の上に置かれたキャベツが、あっという間に千切りになっていく。

「ふう…やってやったぜ。」

青年は男性にしては高めの声で満足そうに呟くと、コンロの側に立つ筋肉隆々な中年男性に声をかけた。

「親父ー！！キャベツの千切り終わったぞ！」

呼ばれた中年男性は、鍋を激しく振りながら、お玉を持った手で白い皿を差す。

「おうっ！その皿に盛ってくれいっ！！後は人参とトマトも頼むわっ！」

青年は、それに答えると手際よく皿を取りキャベツを乗せた。

ふう〜と一息つきがてら店の中を見回すと今日もどうやら仕事上がりの人達で満席のようだ。

青年が働いているのは、青年の父親が料理人を勤める王都でも有名な安い定食屋。

店の名は、ドラゴファイヤー。

味は上手い訳ではないが、その安さから、ここサイドラ国の王都、サイドラでも有名である。

昼と夜の食事の時間には、いつも満席で繁盛していた。

店の中を見回していた青年が今日も上々だなっと思っていると、カウンターに白い皿が乗せられた。

人影が見えないのでカウンターを覗くとカウンターの机と同じ位置に茶色の頭が見え、もそもそと動いている。

青年が皿を持ち上げ声をかけた。

「ご注文ですか？お会計ですか？」

皿を出した方は、机に指をかけ背伸びすると恥ずかしそうに青年に呟いた。

内気そうな男の子である。

「……おかわり。」

青年は、可愛いなあと思いきや微笑ましく思いながら頷くと父親の方に向かって声をかけた。

「ブレゼー！オーダーだ！」

その声に、先程は父親に隠れて見えなかった赤い髪の男の子が、ひよこつと顔をだした。彼の身長もカウンターの机ぐらいである。

「あいよー！クライス！誰のオーダー？」

クライスと呼ばれた青年は、皿を荒い場に入れながら答えた。

「ルドさんちのルイくんだよ。土竜の！」

それにブレゼの元気な声が返ってくる。

「オッケー！ルイか！ちよつとかかるから席に運ぶって言うてくれ！」

それに了解と答えると、クライスはルイに視線を戻した。

「ルイくん、ちよつと作るのに時間かかるみたい。テーブルに運ぶから席に戻って待ってて。」

ルイは頷くと、丸いテーブルの席にテクテクと戻って行く。ルイが席に座ると隣の人に親しげに肩を叩かれていた。

そのテーブルの席は全員、ルイやブレゼの様な小さな子供が座っていた。

しかし、この国にそれを疑問に思う者はいない。それが当たり前の方景だから。

テーブルに座る彼らは竜族なのだ。

この世界では竜族と人が共存している。人と竜は契約を結び、共に成長していく。竜は膨大な力をコントロールする技術を通して学び、人は竜の力を借りる。

先程のルイも土竜が持つ土を操る力を使って大工の仕事を手伝っている。

クライスは、ぼーっと丸いテーブルに座る竜達を見ていたが父親の声で我に返った。

「おいっ！クライス！人参とトマトは、まだできねーのかっ」

1、キャベツの千切り

今は、夜である。

生き物達も寝静まり、ただただ静寂だけが広がる夜である。

そう、昼間は鳥達がさえずり合う森でさえ、静寂に支配されているかのように静まりかえっている時間。

ここにある森もまた、例外ではない。

森に棲む生き物達は寝静まり、木々達も、まるで寝ているかの様にひっそりとしていた。

森の中心付近には湖があり、空から静かに光を注ぐ月の黄色い姿を、さざ波ひとつ立てることなく写している。

突然、風が吹いた。

静まりかえっていた木々がザワザワと葉を揺らし始める。

そして、しなる枝に引っぱられ幹をも曲がるかという瞬間、湖の縁に空から何かが降りたった。

それは、一対の大きな翼を持つ緑色の竜種ワイバーンであった。

湖の縁に降り立ったワイバーンは、翼をたたむと2本の足で立ちあがった。

柔らかそうな白い腹と、大きな瞳は黄色で、それ以外は緑の竜である。

1度、湖に視線を向けるとキョロキョロとあたりを見渡し、もう1度湖を覗きこむ姿は落ち着きがなく、小動物を連想させる。

黄色く大きな瞳は、好奇心に満ちた子供の様な輝きを持ち、愛嬌がある顔立ちをしていた。

竜は、前かがみになり出来る限り首を伸ばして、さらに湖の奥を見るように覗きこんだ。

湖面に浮かぶ月は、風の影響で、綺麗な丸ではなくなっていた。

湖を覗きこんでいた竜は、突然、子供が癇癪を起こした時の様に両足をバタバタさせ、翼をバサバサと大きく動かした。

そして、1回、大きく息を吸い込むと男性にしては高めの声で叫んだ。

「おーい！緊急事態！緊急事態！大変だよー！！」

それに応えるように、歪んだ月を写していた湖面に小さな揺らぎが

生じ、キラキラと輝いていた月の形が消えていく。

湖の中から現れたのは水色の竜であった。

水に濡れた鱗が月の光を浴びてキラキラと輝いており、背にある翼は緑竜に比べ小さく、翼というよりはヒレの様である。

徐々に湖から現れると、鱗同様、水色に輝く瞳をゆつくりと相手に向けた。

「どうしたの？ヒスイ？私は睡眠中だったのだけど？」

ヒスイと呼ばれた緑竜は、水色の竜に向けて落ち着きなく翼をバサバサ動かしながら答える。

「アクア！大変なんだよ！寝てる場合じゃないよ！凄いなだよ！どうしよう！」

水竜のアクアは、ゆつくりと、まばたきを二回した。

そして、意味が分からないと息を吐いてヒスイに視線を戻した。

「ヒスイ、落ち着きなさい。とりあえず翼を動かすのをやめて。音がうるさいの。」

言われたヒスイは、ごめんごめんと翼を落ち着かせたが、まだ興奮冷めやらぬ状態である。

「それがさ！アクア大変なの！火竜の御子が人間と契約したんだよ！」

火竜の御子と聞いてアクアは少し考え、ヒスイに問い掛けた。その声は、至って落ち着いている。

「火竜の御子って、火竜の王の子のことよね？別に、火竜の王が契約した訳じゃないのだから、問題ないでしょう。」

竜の王族の子が人と契約する話は、いくらでもあるのだ。ヒスイは、何をそんなに慌ててるのかとアクアは疑問であるのだが。

「だから、違うんだってば！アクアは隠居なんかしてるから知らないのかもしれないけど、竜の御子は契約してるの！」

湖の中で1日の大半を過ごすアクアは、確かに他竜との交流があまりない。しかし、隠居してるつもりもないのだが、ヒスイの声が段

々とヒートアップしていき、訂正することはできなかった。

「アクアは、なんで分からないかな！だから、御子は契約してるのに契約しちゃったんだよ！！大変だよ！」

そこでアクアはヒスイが何を言いたいか理解した。

「ヒスイ、ストップ！分かったわ。2人の人間と契約したってことなのね。」

意を得たばかりに、頷いたアクアにヒスイは、そうそうと頭を上下に動かした。

「そうなんだよ！火竜の御子が二重契約しちゃったの！前の契約者が人間の王様だったらしくて、大変なんだよー。」

2、しょうが焼き

ここ、サイドラ国の人気の職業は竜騎士である。いや、サイドラ国だけではない、隣国の大国ドラゴナ国、しいては大陸全土そうである。

では竜騎士とは何か。彼らは自分の相棒である竜と力を合わせ自国を守る騎士であった。騎士は騎士でも普通の騎士とは違い、竜の力を用いるため、空を飛べたり、重い岩を軽々と持ち上げたりと、人外の力を発揮できるのだ。そのため偉人として逸話が多くのこっており、少年達の憧れの職業であった。

そう、今年15歳になったクライスの友達も例外ではない。

目の前で弁当を広げるリヒャルトにクライスは目を向けた。

青い色の髪を肩ぐらいで綺麗に切り揃え、青い大きな両の目をキラキラと輝かせている。

「おいっ！クライス！ついに来月は契約だぜ！たっのしみー！」

「そっだね」

呑気なクライスの返事にリヒャルトは盛大に溜め息をついた。

「はあゝ。どうせクライスは料理のことしか興味ないもんな。うちのクラスで竜騎士に興味ないのクライスだけだぞ?」

そう言われたクライスは、自分の弁当を開けると香りたつ匂いに幸せそうな表情をしていた。

「リヒャルトは、うちのクラスっていうけど、別に全員が竜騎士めざしてる訳じゃないでしょ? 銭湯屋継ぐやつもいるしさ」

そう言って、美味しそうに弁当を咀嚼しはじめたクライスにリヒャルトは不満そうに言う。

「そりゃそうだけど、一度はみんな竜騎士に憧れるからこそ、この学園に入ってるんだぞ? だいたい定食屋継ぐのに学園に入る理由ないじゃん」

今まで何度となく繰り返された会話にクライスは、いつもと同じ返事を返す。

「いいんだよ、リヒャルト。僕は父さんみたいな料理人になりたいんだから。この学園だって父さんが通ってたから興味があったの。」

そしてクライスが続けて話そうとするのを、リヒャルトはさえぎった。

「それに、うちのしょうが焼き定食は絶品なんだぞ！……だろ？はいはい、もう聞きあきたっつーの。」

自分のセリフを取られたクライスは、じゃあ聞くなよーと文句を言いつつも弁当の中身を食べながら幸せそうに笑った。

3、しょうが焼き2（前書き）

すいません。実は学園内の教室で昼飯たべてる設定だったんですが、前話で設定説明がゴソツと抜けてました。お気に入り登録ありがとうございます。

3、しょうが焼き2

クライスとリヒャルトが教室で弁当を食べていると、頭上から声が落ちてきた。

「お！弁当つまそー！俺にも分けてくんない？」

それは、黒い短髪をツンツンに逆立てた、がっちりとした体型の色黒の男だった。横には水色の髪を男と同じ髪型にした小さな男の子が立っている。男の子は男の契約竜が人型を取っている姿であった。リヒャルトが、男の後ろにある椅子を指して言った。

「よっ！ライじゃん！とりあえず椅子に座れば？ライは今日、弁当じゃないの？」

ライと呼ばれた相手は、椅子を引つ張つてきて座り、膝の上に契約竜を抱きあげる。そして、半ば契約竜に身体を被せる様にして、リヒャルトに向けて身を乗り出した。

「リヒャルトおー！よく聞いてくれたっ！実はなっ！怪奇現象が起きたんだ！！」

好奇心旺盛のリヒャルトが、その話題に食い付く。

「かかか怪奇現象！？なにっ！？何があつたのお！？？」

大きい。声が大きい。

リヒャルトの声が大きかったためクラスで昼食をとっていた生徒達が一斉に、こちらに視線を向けた。クライスは、ちらつと横目で生徒達の反応を見る。元来、店以外では声を張り上げることもなく控えめな性格なので注目されるのは慣れないのだ。周りの視線を避ける様に、より一層もくもくと弁当を食べ始めた。しかしクライスの気持ちに反して、ライの声も大きくなっていく。

「そうなんだ、怪奇現象だ！！実はな、さっき俺が昼飯を食べようとして弁当の蓋を開けたんだよ！そしたらな！なんと！！」

「なんと！？」

両手を握りしめて先を待つリヒャルトにライは深刻そうな表情を作り顔を近付けた。契約竜が、ますます膝の上でつぶされそうになった。クライスは、もくもくと弁当を食べながら、そう言えば今日はライの契約竜がおとなしい事に気付いた。いつもは悪ノリしてライを煽っているのだ。不思議に思いチラツと契約竜に目を向けると、突然、ライが大きな声をだした。

「中身がなかったんだ！空っぽだったんだよ！！！」

それに追従してリヒャルトも両手を目一杯広げて驚く。

「えー！ー！空っぽってお弁当の中身が！？」

「そうなんだ！ー！……俺はまだ食べてなかったのに無くなってたんだ……」

そう言うときライは、しょぼんと肩を落とした。リヒャルトは口を開いたまま驚いた顔で固まっている。クライスは、弁当に入ってたしょうが焼きをツマミながら気落ちしているライに目を向けた。

「ねえ。ライ。今日はアクアが大人しいね。調子悪いの？」

言われたライは、クライスからの突然の質問に、ぼかんとしライの契約竜であるアクアはビクツと肩を大きく揺らした。その様子にクライスは、ふふふつと笑うとアクアに、にやりとして言う。

「どうやら僕、怪奇現象の正体わかつちやったみたい。」

それに反応したのは当事者のライでもクライスに見られているアク

アでもなかった。ガタンつと勢いよく椅子から立ち上がったリヒヤルトである。大きな声でクライスに詰め寄った。

「ええ〜！？正体ってなに！？お弁当食べる幽霊とかっ！？？」

ざわざわっ。

リヒヤルトが叫んだ途端、教室内のあちこちから幽霊？とヒソヒソ聞こえてくる。クライスは人差し指を自分の口もとに当てて、リヒヤルトに言った。いわゆる静かにポーズである。

「ちょっと、リヒヤルト声が大きいよ。静かに！」

あは〜ごめん、といって椅子に座るリヒヤルト。そしてクライスは自分の口元にある人差し指をライの膝に座っているアクアの唇の横に当てた。そして、唇の横から離された指先には赤い物体が。クライスは、ふふつと笑って言う。

「どうやら今日のライの弁当にはケチャップが入ってたみたいだね。」

ハッとしたアクアが、その小さな両の手でバツと口元を隠した。先

程のクライスの質問から、なりゆきを見守っていたライが事情を把握したのだろう。自分の契約竜であるアクアを覗きこむ。

「まさか、アクアが弁当食べたのか？」

アクアは両手で口元を隠したまま、ブンブンと首を横に大きく振った。ライは自分とアクアが向き会うようにアクアの向きを変え優しい声で言う。

「アクア、怒らないから正直に話してごらん？な？」

その言葉にアクアは首を傾けて問う。いつもはヤンチャな声が幾分不安で力弱くなっている。

「本当に怒らない？本当の本当に？」

「ああ、怒らないよ。」

その2人のやりとりを邪魔しないようにクライスとリヒャルトは静かに見ていた。アクアは口元から両手を離すと意を決したように大声で叫ぶように言った。

「食べちゃった！ごめんっ！！！」

そして次の瞬間、ライは両手で拳を握るとアクアの頭を挟みこんだ。

「俺の弁当食べたのは、お前だったのか！！！」

そして、ぐりぐりぐりぐりと拳に力を入れて回す。アクアは悲鳴を挙げながら、助けを求めた。

「うわっ！いたっ！いたた！痛いよっ！リヒヤルト、クライス助けて！！止めてっ！痛い痛い！！！」

なおも続けるライに、あわわわわと慌てるリヒヤルト。そして叫ぶアクア。結局、クラス中の視線が集まっていることに居たたまれなくなつたクライスは、そのまま静かに3人から離れていった。

4、しょうが焼き3（前書き）

話が進まないです。もっと上手にかけるようになりたいです。

4、しょうが焼き3

昼食が終わって直ぐの授業は眠いものだ。クライスは欠伸を噛み殺し、一番後ろの席から教室の中を見回した。教室は40名程が授業を受けており、1人に1つ木製の机と椅子が与えられていた。教室の前には黒板があり、現在、神経質そうな教師が授業を行っている。教室の後ろには、生徒達の持ち物を保管している棚が並んでいた。だいたいの生徒は1人で授業を受けているが、ライを含めた数名の生徒は契約している竜と共に席に着いている。ぼーっと教室内を見回していたクライスは、突然教師に名指しで指名され慌てて姿勢を正した。

「では、クライス君。余裕がありそうなので質問に答えて下さい。」

クライスは、クラスメイトに注目され内心ドキドキしながらも静かに立ち上がる。その様子を満足そうに見た教師は、質問を投げ掛けた。

「それでは、問題です。竜と契約するための条件は？」

クライスは自分がかかる問題で、ほっとした。

「竜と契約するためには、一定の魔力と竜との相性が必要です。」

教師は1つ頷くと、座るようにクライスに促し生徒全体を見渡しながら補足の説明をした。

「そうですね。竜との契約に必要なもの。1つは魔力です。なぜ魔力が必要か。それは、人が持つ魔力の流れを竜族が真似して、力のコントロールを覚えていくからです。余りにも魔力が小さいと魔力の流れも微々たる物であるため、竜族にとって魔力の流れを読み取る事が困難で中々真似できません。ですから、一定の魔力がなければ契約できないのです。それではリヒャルト、2つ目の相性について説明できますか？」

意外にも真面目に授業を受けていたリヒャルトは、はいつと返事をして席を立つと元気よく答えた。

「竜と人との相性とは属性との相性とも言えます。竜には闇、光、火、水、土、風の6つの属性があり、人によって相性のよい属性の竜と契約が結べます。」

「リヒャルト、正解です。しかし、わたくしが補足しましょう。リヒャルトは、座ってよろしい。」

リヒャルトが席に着くのを見届けると教師は説明を始めた。

「リヒャルトの言うとおり、竜には属性があります。人がどの属性と相性がいいのかは我々も分かりません。研究者の中には、魔力に属性があるのではと言う者もいますが明らかにされていません。ただ自分に合った属性の竜と契約できたとしても大抵の人は1体の竜族としか契約しません。それはなぜかという竜の力を借りるためには精神力が必要だからです。竜術とは自分のイメージ通りに、竜に力を使ってもらうことなのですが……んー、自分のイメージを具現化する様な感覚と思ってもらえばいいでしょうか。具現化するには、より明確にイメージする必要があるので強い精神力がいるのです。複数の竜相手になると精神力も倍になり人間に負担がかかります。もし明確にイメージできず竜の力が暴走してしまった場合、大変なことになりますね。ですから、1体との契約が普通なのです。」

そして教師は続ける。

「来月は竜と契約する授業があります。今説明した理由で、授業の対象者は、まだ竜属と契約していない生徒になります。それでは今日の授業は、ここまでです。」

そして、教師は教室を後にした。教室が騒がしくなり、クライスの側にはリヒャルトがやってくる。

「クライス！来月楽しみだねっ！早く契約したいなあ〜！！契約ってどうやるんだろ〜？」

クライスはノートに何か書き込みながら興味なさげに言った。

「さあね〜？ライは契約してるしライに聞いてみたら？？」

そんなクライスの様子にリヒャルトは、鼻息荒く言う。

「ほんとに、クライスは竜に興味ないよねっ！！ちょっと僕は異常だと思っねっ！……って何書いてるの？？」

好奇心旺盛なりヒャルトは、クライスがノートに描いた絵を興味深そうに覗きこんだ。クライスは、ペンで絵の細部を指してリヒャルトに言う。

「これはね、料理用のコンロなんだ。今、うちの店で使ってるのはブレゼの竜術で火力調節してるんだけど、最近ブレゼも調理で忙しいから火力調節が上手くいかない時もあるんだよ。だから、どうに

かならないかと思ってコンロ開発中なんだ。」

「へえ…火力ってそんなに大切なの？」

「火力は大切だぞ？しょうが焼き作るのに強火のままだと焦げるしな。そろそろ帰ろうか」

ノートを閉じたクライスはカバンを持ちリヒャルトと共に家路に付いた。

5、クリームシチュー

いよいよ竜との契約の授業が翌日となった夜。クライスはクリームシチューを食べていた。クライスの家が営む定食屋は1階が店で2階が居住区となっている。店を閉めてからになるので他の家よりも遅い時間に2階で家族一緒に夕食をとるのが日課であった。今日もいつも通り家族で長方形の机を囲み、自分の右隣に妹、正面に父、対角線に母、そしてお誕生日席には、父と母の契約竜が座っている。クライスがクリームシチューを堪能していると右隣に座る妹が声をかけてきた。

「そういえば、お兄ちゃん。明日、竜と契約するんでしょう？」

妹は、女の子らしく可愛いものが好きで、人型をとっている竜が小さくて可愛いと日頃から言っている。早く自分も竜と契約したいらしい。

きつとどこからか噂を聞きつけ竜と契約できる兄が羨ましくてしょうがないのだろう。8歳になる妹は、たまに大人っぽい発言をするものの、まだまだ子供っぽい。

「んー、たしかに明日契約の授業あるけど、ティファは誰から聞いたの？」

妹のティファは、腰まである柔らかい金色の髪をふわふわさせながらクライスの方に身を乗り出して言う。

「ライよ。銭湯屋の息子のライ。今日、私、お母さんとお風呂に入ってきて帰りに会ったの。」

ライか。

まったく余計な事を。

クライスがシチューをスプーンで掬うと今度は左側から声が聞こえた。父の契約竜のブレゼだ。

「なにになに？明日、家族増えるのか！？俺にも舎弟ができるってことかよー！うひょー！できれば火竜がいいぜ！！」

それを聞いて黙ってられなくなったのか、鈴が鳴るような声が話に入ってきた。ブレゼの対面に座った母の契約竜の光竜である。

「わたくし、光竜の女の子がいいわ。るららって一緒に歌うたの。」

それに反論するのはブレゼ。

「また歌かよ！リーン！光竜は、まったり気質が多くて嫌だね！しかも女の子とか走り回って一緒に遊べないし！」

言われたリーンは、るららと口ずさみながらブレゼに言う。

「わたし土竜のが嫌だわ。無口なんでも。つまらない。るらら」

ブレゼも、それには同意し、うんうん頷く。

その様子を見ていたティファは黙っていらなくなったのか兄クライスに瞳をキラキラさせながら言う。

「お兄ちゃんは、どの属性がいいの？」

期待が痛いぜ妹よ。

「悪いけど僕は、竜族と契約できないよ。」

しゅん。

さっきまで和気あいあいとしていた食卓は静寂に支配された。

6、クリームシチュー2

静まりかえった食卓に最初に響いたのは妹の声だった。

「ええ〜！？なんで竜族と契約しないの！？？信じられないっ！！」

言うと思った。

クライスは、そっけなく妹に言う。

「別にいいだろ。契約しなくたって。」

それを聞いたブレゼが目を見開いて言う。

「クライス、お前本当に契約しない気か？お前の魔力なら余裕で契約できるぜ？」

「ああ、しないつもり。」

クライスの答えに妹が立ち上がった。

「お兄ちゃん！竜と契約しないとか、おかしいよ！なんで！？」

ブレゼも、そつだそつだと手に持ったスプーンを掲げて言う。

「それにクライス！店だって忙しいんだぞ！人手ほしいぞ！火竜が増えれば、火力の調節だって楽になるの知ってるだろ！」

その言葉にクライスは呟いた。

「知ってるからコンロの改良してるんだろ。」

それを聞きもらさなかったブレゼが椅子の上に立ち上がって叫んだ。

「はあゝゝ！！？じゃあ、お前最初から竜族と契約する気なかったってことかよ！」

今まで黙ってクリームシチューを食べてた父親が、ブレゼの頭を殴った。

「ブレゼ。行儀が悪い。椅子に立つな。」

それどころじゃねーよ、とブレゼは父親につめよった。

「だってクライスが竜と契約しないって言うんだぜ！？アッシュからも言ってくれよ！契約しろって！」

言われた父親のアッシュはクライスを見つめた。

「本当に契約しないのか？契約した方が、色々と助かるぞ？」

クライスは首を横に振った。

「それでも、できないんだよ。親父、悪いな。母さん、シチューご馳走さま。」

今まで静かに事の成り行きを見守ってた母親に、声をかけるとクライスは自室に向かった。背後からブレゼのクライスを呼ぶ声が聞こえたが、振り向かなかった。

クライスは部屋に入ると、窓際にあるベッドに飛びこみ、1つ息を吐き出し仰向けになる。そして天井を見つめた後、いつも首からぶら下げているロケットを右手で弄った。

「許されないよな。僕が…いや、俺が契約するなんて。」

そして泣きそうな顔になると、窓から見える星空を眺める。

「俺のこと、許してくれないだろう?。」

クライスの言葉に答える声は、なかった。

7、コロッケパン

契約の日、当日。

クライスのクラスは屋上に集まっていた。生徒達は、みな、幾分そわそわしている。そこへ藍色の髪を後ろで束ねた男が遅れてやってきた。彼こそが、この授業の担当教師であるシュバルツ教諭である。

「はい、みなさん。これから契約の儀を行います。」

その声に、生徒達の視線がシュバルツの方へと向く。シュバルツは、につこりと笑うと自分の足元を指差した。

「これから詳しい説明をします。まず、こちらにある円を見てください。」

言われて、シュバルツの足元を見ると青い魔方陣が見えた。

「みなさんは、この魔方陣の上に立ち魔法力を魔方陣へと流してもらいます。この魔法陣は竜界と呼ばれる竜の故郷に繋がっており、皆さんの魔力に反応して、竜界で待機している竜の子供が、こちらにやってきます。」

そこで元気のいい声がシュバルツの言葉をさえぎる。リヒャルトである。

「シュバルツ先生、竜界って6つあるんですよね？全部に繋がってるんですか？」

「そうですね。竜界は、闇、光、火、水、風、土と6つに別れているらしいです。人間でいう6つの国があると言った方が正しいでしょうか。その6つの国に、それぞれ魔方阵があり、この魔方阵に繋がっているのです。6つの国の魔方阵の周りには、竜の子供たちが待機しており、自分が惹かれる魔力に反応するようになっていきます。」

その言葉に、1番前にいる生徒が得意げに続ける。

「シュバルツ先生。でも、昔は違かったんですよね？竜の子の親が直接、人間に預けていたと父に聞きました。」

シュバルツは、その生徒の質問にも陽だまりの様な笑顔を向けた。

「その通りです。よく知っていますね。はるか昔は、竜の親が直接、人間に子供を託しにきました。竜の赤子が人型をとるのには5年の歳月がかかるとされていますが、人間に託すと一月で人型をとれるようになります。ですから早く人間に預ければ、その分早く成長し、力のコントロールが上手になると考えられていました。いわゆる英才教育のように考えられていたのでしょうか。」

そう言うとシュバルツは、ライの方を向く。

「ライくんは、アクアくんをそうやって預けられたのではないですか？」

ライは問われて、そうですとうなずいた。その様子を見ていたりヒヤルトが、はあーいっと右手をあげる。

「じゃあ、なぜ今は親御さんが預けにこないんですか？」

「そうですね。赤子のうちに預けられると人間側が困ってしまうからでしょう。力の教育に人間界での常識を教えたりと多くの事を教えずにはいけませんからね。おとなしい光や闇ならいいですが、やんちゃな火や風の場合は大変です。」

そして生徒達に、納得した気配がみられるとシュバルツは魔方阵から離れて言った。

「それでは、さっそく始めましょう。じゃあ、向かって右側から順に魔方阵に乗って下さい。」

8、コロッケパン2（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。やる気がでて、2話連続投稿です。小説紹介ページのあらすじが、全然あらすじになつてなくて、どうしようかと悩むこの頃。

8、コロッケパン2

青空の下、屋上では順番に生徒達が竜と契約していた。あるものはクライスの父のように火竜と、あるものはライのように水竜と。クライスは列の1番後ろで、その様子を眺めていた。クライスの隣では、順番待ちのリヒャルトがライに話かけている。

「ねえねえ、ライ。なんでアクアのお母さんは、ライにアクアを預けにきたの？」

アクアは召喚されたばかりの水竜と話しており、そんなアクアを目で追いながらライは言う。

「ん、それはな。俺んち銭湯だろ。うちが銭湯やってるのって水竜に好かれる家系だからってのもあるんだ。水竜は水を操れるからな。アクアの母親が子供の頃、うちに預けられてさ。それで信用できるからって赤ん坊のアクアを預けにきた訳。家の中は水竜ばかりだし、教育には、うってつけなんだよな！」

リヒャルトは、ライに言う。

「そうなんだ。でもさ、なんでライなの？ライの家って、お姉さんもいるじゃん。」

ライが笑ってリヒャルトに言う。どこことなく声が嬉しそうだ。

「ははは。それがさ、聞いてくれよ。なぜか1番俺にアクアが懐いてさ。だから俺が契約したんだよな。」

リヒャルトは、なるほどね〜と何度か頷くと、シュバルツ教諭に呼ばれて慌てて魔方陣に向かいながらライに言った。

「話の途中で、ごめんっ！次、僕の番だからいつてくる。」

それを片手を上げてライは見送る。リヒャルトが魔方陣に行ってしまうと、ライはクライスに話かけた。

「なあなあ、クライス。リヒャルトは何属性だと思う?」

クライスはリヒャルトが乗った魔方陣が青く光るのを見て、迷いなく言った。

「リヒャルトは風だと思うな。」

それを聞いたライは訝しげな表情をし片眉を器用にあげた。クライスは、そんなライの様子を見て小さく笑うと、リヒャルトの方を指差して言う。リヒャルトの横に緑色の髪の子が現れた。リヒャルトの膝ぐらいの位置に頭がある小さな子供だ。

「自由奔放な性格のリヒャルトには、自由奔放な風属性。ライは取り乱すと煩いけど普段は冷静だろ？だから、冷静な水属性なんだ。」

言われたライは、はっとしてクライスを見た。

「おいおい、そんな話初めて聞くぜ？でも確かに、言われてみればそうだな。他の奴らのも、合ってる。そんな話、誰に聞いたんだ??？」

クライスは服の上から首に掛けたロケットを触ると曖昧に笑った。

「さあ、誰だったかな。父さんだったかも…?」

そこへリヒルトの声が飛び込んでくる。

「クライス〜!!次、クライスの番だよ〜!!!!」

リヒルトの方へ顔を向けると、小さな男の子を腕に抱いて走ってくる所だった。それに、今行くと答えるとクライスは魔方陣へと向かった。

9、コロツケパン3

クライスは魔方陣の目前までくると少し離れた所に立つシュバルツ教諭に言葉を掛けた。周りの生徒達は既に自分が喚んだ契約竜に夢中で、こちらを気にしている者はいない。

「シュバルツ先生、どうしてもやらなきゃダメですか？」

にこにこしてクライスが魔方陣に乗るのを待っていたシュバルツ教諭は、その笑顔のまま若干、首を傾げて言う。

「絶対と言う訳ではないですが、なぜです？」

クライスは少し躊躇い、おずおずと言う。

「竜族と契約できないと思うんです。」

そう言われたシュバルツは、ますます訳が分らないと表情を真面目なものに変えた。

「しかしクライスくんは、この学園の入学試験で魔法力を計測していますよね？入学できたということは、契約するための魔法力を満たしているということですよ？」

クライス達に通っている学園は、竜騎士へとなるものが多い。そのため入学試験には、竜と契約するための魔力があるかどうか魔法力の計測があつた。契約に必要な魔法力に達してない場合、入学できないのだ。こういうと差別のように聞こえてしまうが、入学試験で落ちる者はいない。この世界の人間は魔法力が豊かで、竜と契約しないものは、自分から竜との契約を拒否する変わり物であつた。クライスは俯いて地面を見つめた。その表情は、苦しそうにも見える。

「分かりました。今回、クライスは見送りましょう。」

「すみません。ありがとうございます。」

クライスは礼をするとリヒャルト達のもとに戻っていった。その後

ろ姿をシュバルツは、納得がいけない表情で見送った。

10、コロッケパン4（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。ちょっと今バタバタしていて更新遅めです。

10、コロッケパン4

整備された道の両側には、木造や石造の建物が並ぶ。それは、普通の家だったり、何かのお店だったり様々である。この通りは学園からクライスの自宅までの通学路で、今日もリヒャルト、そしてライと共に帰宅している所だ。赤いショルダーバッグを肩から斜めにかけて、手を大きくふるリヒャルトが真ん中。店側にクライス、道路側にライ。そして、ライの前をアクアが歩くという配置が常だ。だが今日は、リヒャルトの前をリヒャルトの契約竜が歩いており、アクアと何やら真剣に話をしていた。後ろの3人は、小さな2匹の竜が一生懸命に話す姿を見て珍しく静かである。いつもはうるさいリヒャルトも自分の契約竜を穏やかな笑顔で見守っている。

すると見つめられている事に気付いたアクアが振り向いた。

「なに？そんなへニヤつとした笑顔で見られると気持ち悪いんだけど…」

アクアの言葉に、アクアと付き合いの長いライが答える。

「いや、別に？」

「ふん…？」

そうは言ったものの視線は依然としてアクア達に向けられている。アクアと話していた緑の髪の男の子は、ヒヤルトの所までトコトコ歩いていき、ひしつとりヒヤルトの膝に抱きついた。リヒヤルトの相貌が崩れる。

「どうしたのー！？ウインは疲れたのかな？」

ウインと呼ばれたりヒヤルトの契約竜。膝上ぐらいしかない男の子は、その小さな身体を目一杯に広げてジャンプする。

「りひゃうとー抱っこ！抱っこ！！」

幾分、舌足らずな言葉で求められ、リヒヤルトは両手でウインを抱えた。ウインの顔を覗きこんでリヒヤルトは言う。

「ウインはアクアと何のお話してたのー！？」

ウインは一瞬キョトンとしたがりヒヤルトのほっぺたを掴み引つ張りながらキャハハと笑って答えた。

「今日、族長、寂しそう。りひゃうと、ほっぺ、のびうきゃははっ」

痛い痛いと言ურიヒャルトに変わり、ライが興味深そうに聞いた。

「族長、寂しそうって何だ？」

しかしウインは、リヒャルトの頬が気に入ったのか頬に夢中である。なのでライはアクアに助けを求めた。

「竜族には、それぞれの属性を代表する族長がいるんだよ。その族長が今日の召喚の時に寂しそうって話。」

アクアの説明に、ライが、なるほどと何度か頷く。

クライスが、そんな2組のやり取りを黙ってみていると、パンが焼ける美味しそうな匂いが漂ってきた事に気付いた。匂いの元に顔を向けると、店先に美味しそうなパンが並んでいる。その中にコロツケパンを見つけたクライスは思わずウインに話かける。

「ねえねえ、ウイン。コロツケパン食べようか。」

今までリヒャルトの頬を掴んでいたウインは、その言葉に手を放す
と不思議そうに呟く。

「こおっけ？」

その様子にクライスは小さく笑う。そしてパン屋でコロツケパンを
2つ購入した。売っていたコロツケパンは縦長のパンに切れ目をい
れ、その間にコロツケと野菜を挟んである。そのパンを半分にちぎ
ってウインとアクアに渡すクライス。不思議そうにパンを見つめる
ウインにクライスは言う。

「食べてくらん？きっと好きになると思うな。竜界には無いでしょ
？」

ウインは恐る恐るパンをかじる。

ぱくっ。

むしゃむしゃ。

ごっくん。

そしてウインの目がキラキラと輝き大声で叫んだ。

「おいひっ！んまっ！いい！！！」

後は一心不乱にコロッケパンをむさぼるウイン。んまーんまーと言いながら頬に食べかすを付けている。初めてのコロッケパンに感動したウインだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3775q/>

竜の旋律

2011年2月2日12時29分発行